
Pearl in the Shell

三月やよい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pearl in the Shell

【Nコード】

N1562F

【作者名】

三月やよい

【あらすじ】

地味な女子高生・秋保が召還したのは猫型悪魔！？綺麗になつたら簡単に幸せになれるものなの？？

プロローグ（前書き）

こんにちは

三月やよいです。

久しぶりに長いお話を書いてみました。

相変わらず読みにくい箇所あるかと思いますが気を付けて書き上げますのでお付き合いの程、よろしくお願いします。

ブローグ

教室の床の後ろ半分を使つて大きな魔法陣を描いた。

鳩を捕まえて殺すのは怖くて出来なかつたので代用品としてスーパーで買つてきたマグロの血を使った。

（鳥は可哀想なのに魚は平氣つて残酷かしら？）

塚田秋保はカーテンを閉めて薄暗い教室を見渡して一人ごちした。

- ・ 日常利用している公共の場所で深夜行つこと
- ・ 魔法陣を描くのに鳩の血を用いること
- ・ 召還の代償として若い雌鳥を用意すること

以上の注意書きが記されているHPのプリントアウトを何度も確認しながら魔法陣を美術の授業で使用している水彩絵の具用の筆でマグロの血を付け何語だか解らない言語に縁取られた丸い図を描いた。本来なら深夜に儀式を行わなくてはならないらしいが学校に夜忍び込めるほど度胸もないので土曜日の部活生たちに紛れて校舎に潜り込んだ。

こんな状況でクラスメートが入ってきたらどうする？

（きつとどうも変わらない）

どうせ今でも友達もいないし存在感なんてないもの。

奇行のひとつくらいちよつと噂になるくらいだわと秋保は腹をくくつたのだ。

「えつと・・・そしたらどうするの？」

若い雌鳥の代わりにクリスマス用などに売られているチキンを用意した。

生でいいのか解らなかつたがホールサイズの味付けチキンが普通にスーパーで売っている季節ではないので生のまま発泡スチロールにのせてある。

これで呼び出す為の魔法陣も描いたし生け贄も用意した。

あとは悪魔を呼び出すだけ。

そう、欲しいのは万能の力。

きっと人間が古来より懂れている魔法という術。

送り主不明のメールが来たのは2週間前だった。

『悪魔の召還方法』

そんな安易で気持ち悪いタイトルのメールなんていつもだったら即捨ててしまふのにその時は何故かスグに削除はせずに内容を読んてみた。

『信じても救ってくれるかわからない神よりも明朗会計な悪魔と取引しませんか？』

秋保はその一文につられてメール本文を受信した。

そしてそれをPCへ転送し本文をプリントアウトして今日に備えたのだった。

不可思議な文字に円形と三角形を駆使して描き上げる不思議な図形。辺りは魚屋のような一種独特の生臭い香りが立ちこめていた。

その中心にチキンを置き、秋保はHPの指示通り、呪文を唱えた。

「テキ・・・テキ・・・ニココ・・・我に秘術をさず・・・けん？」

練習をしなかつたので若干棒読みかつ途切れ途切れではあったが何とか全文を読みあげた。

(これで・・・? いいの・・・?)

ふと自分がやっていることが馬鹿馬鹿しくなり「ふー・・・」大きく息を吐いた。

「そうよね。私ってば・・・何を期待したのかしら・・・バカみたい」

「そうや。ねーちゃん。アンタ何で我を呼んだんや？」

「きやあつつつ」

秋保が悲鳴をあげるのも無理はない。

一人で居た薄暗い教室の中で突然ヒトリゴトに対して返事されたのだ。

「なっ・・・」

「驚きすぎや、ねーちゃん。呼んだの自分やる?」

驚くべきは返事されただけではなくてその返事の主。
どうみても猫。

しかも可愛い白猫。

つやつやの毛並みで小柄な子猫ちゃん。

でも返事する声はおじさん声。

しかも何故か変な訛り。

(え? 関西人? 悪魔? ってか関西弁じゃない! コレ!)

叔父家族が関西に住んでおり関西弁に馴染みのある秋保にはその嘘くさい関西弁ともなんとも言えない訛りに対して非常に違和感を覚えた。

(って違う。 関西弁とかそんなじゃなくて、これ、猫。
ふわあああ

大きくあくびするその可愛い猫ちゃんは

「あんさ、願いなんかあるんやろ? ちゃんと言つといいよ」

なんて秋保に小首を傾げる可愛いポーズで言ってきた。

「あ……えっと……」

そう。 願いがあるから呼んだのだ。

でも言葉がでない。

あまりに非日常的過ぎて脳がうまく現状を処理し切れないのだ。

あの…… 秋保が言葉に詰まっていると

「早くいいな、しかも分かり易くな」

猫は可愛い顔と不似合いな声でせかした。

「あ……貴方はあ……くま?」

「そうや、その通りや。 何や? その質問が願いか?」

「い……いいえ、違うわ……違う……」

秋保は大きく深呼吸をし

「綺麗に……綺麗になって明る性格になりたいの……」

口が渴いて声がうまく言えなかったが何とか言葉にした。

言わなくては! だって怪しいけれど何か……もったいないじゃ

ない？

「で、どうなりたいんや。ねえちゃん。

ギャル系か？キヤバ系か？

それとも万人受けを狙ってアイドル系か？

あー・・・オタクウケなマニア系も需要はそこそこやな。

どれがいいんや？」

やつとでた言葉に対する返事はいやに軽いものだった。

ヤケに世俗感溢れる猫（悪魔？）だなぁと秋保はいくぶかしがった。

「よく・・・そんなすらすらでくるわね？」

「そりゃねーちゃん。悪魔つちゅーのは博識じゃなきゃ勤まらん商いなんよ」

「そう・・・」

少し疑わしくも思ったがそもそも猫が喋っているだけで十分不思議出来事なのでこれはちゃんと願い事をしなくては損かもしれないと思ひ直した。

「そうね・・・じゃあ雑誌に出てくるような・・・綺麗系ギャルになりたい」

ぱつと人目を引きつつもただのギャル系よりもクラス感あるかんじに・・・秋保はぼんやりイメージしながら答えた。

「ほいな。おやすいご用。

なんや。

そんな魔法なんかつかわんでも自分で何とかなる範囲なん違うか？

あれやな、最近の人間つーのはどうも他力本願やな。

まあええわ。こっちも商売やからな。」

やれやれと小さな頭を振ってみせた。

その仕草は妙に人間じみていて秋保は何だか薄気味悪く感じた。

「ふ・・・ん。くるつと回ってみ・・・なんや、ねえちゃん。

地味なナリだが結構いいもん持つてるやんけ。

そやなあ・・・ちよつとメイクポーチ見せてみ。

ってなんや、コレ。自分女子高生だよな？

女子高生つちゅーもんはもっとうがつり化粧品持つてるもん違うの？」

秋保が自分のポーチを差し出すと猫型悪魔は心底信じられないという声で（表情は読みとれない・・・だって猫だもん。）やれやれという風にまた頭をゆっくり振った。

「ヒト様のもんやけど我慢してな」

そう猫型悪魔は言うつと2本足で器用に歩き女子生徒の机を勝手に漁り・・・誰かが学校に置きっぱなしにしていると思われるメイクポーチを持ってきた。

「ま、まかせとき。」

そもそもな、ねえちゃんスタイル悪くないんだしもつとスカート短くすりゃいいんや。

あとな、なんやその寝ぼけた目は。

取り敢えず目なんてモノはでかくすりゃそれなりに可愛く見えるんや」

そう言いながらリキッドアイライナーでびっちりアイラインを引きマスカラを下地から丹念に塗った。

「いたっ・・・いたたたっ」

「ねーちゃん。自分オンナやろ？この眉はあかんって」

猫の手なのに器用に毛抜きで余分な眉毛を抜き驚くほど丁寧に眉を描き上げていった。

「髪もまつくろやなあ・・・でもまあ健康だからええか」

コームを取りだし盛大に逆毛を立てふわふわと髪を盛った。

「まあこんなもんかな？自分でもチェックしてみ」

鏡を見て一瞬誰だかわからなかった。

渡された鏡をのぞき込むとそこには良く知っている顔と似ているが見たことないように感じられる少女の顔があった。

つややかな白肌に長い睫毛と大きな瞳。

唇はふつくと濡れていて妙に色気があった。

「すごい……」

自分なのに自分じゃないように感じられた。

少しメークするだけでこんなにも違うなんて……今まで何でもしなかったのだろう？

秋保は妙な後悔を感じた。

「私……」

「どうや？結構イケてるやろ？」

猫型悪魔は満足げな声で言った。

「これ……自分で出来るかしら？」

「あーできるできる。」

お行儀悪いがほれ、この雑誌ガメて参考にすりゃいいやろ。」

また誰かの机を漁って見つけたものだろう。

もはやどこの人種かわからないくらい明るくカラーリングした髪にカラコンの少女が表紙を飾っているファッション雑誌を口にくわえ秋保に差し出した。

「Cherry Girl……」

何気なく表紙のロゴをつぶやいた。

「追加情報でいいこと教えよか？」

この雑誌な、読者モデルは新宿のヨーヨー劇場広場でたむろしてる女子高生の中から

可愛いコを見つけて声かけてるんや。

中には雑誌関係者を名乗ってナンパしている偽者もおるから気をつけや。

見分ける方法教えちやる。

本物はな、まず何処か事務所に所属しているかを確認してきてその後名刺をだすんや。

そしてな、その場でポラ撮影し写りが良ければ来月号にはあんさんの写真が出るってことや」

どうしてこの猫はそんなことまで知っているのだろうか？

「私・・・別に雑誌なんて出たくない・・・」

キレイになつてちよつと特別扱いしてもらえるだけでいい。

ちよつと周囲に溶け込んで友達とかとお話出来るだけでいい。

「何欲のないコト言ってるんや。」

あんな、同じくらい可愛いAちゃんとBちゃんがいるとするやろ。

そのウチ片方が雑誌に出ているプチ有名人だとするやろ。

するとな、男も女も有名な方と知り合いになりたいって思うもんなんや。」

目立つておいて損はないって。

悪魔は妙に人間じみた説明をした

「どや？満足か？」

ねーちゃん。結局今日はわいの魔力使わなかったなあ。

ま、次回また呼んでや。その時に取引しましょ」

「え？またいいの？」

「おう。今回は魔力、使わなかったからな。わいも対価をもらえないし」

「そう・・・また・・・マグロ・・・」

難解な記号を書かなくてはと思うと気が滅入った。

「ああ。そうか。んじゃわいのメアド教えるから、メールしてや」

ほいつと秋保の携帯を勝手に取ると肉球でばむぼむと携帯を叩いた。

「登録完了。『ねこ』で登録しといたから。また呼んでや、ねーちゃん」

そう言うとき『ねこ』は忽然と・・・煙のように消えてしまった。

猫・・・そして悪魔・・・夢ではなくソレが確かに存在した証としてこつてりとメイクされた秋保と携帯に「ねこ」のメモリーが残った。

プロローグ（後書き）

猫がお話したらホラーかしら？

その方が楽しいじゃない？（前書き）

このシーンはワタクシの作品、優しい時間の少し前のお話になります。

お時間ありましたら合わせて読んで下さいなっ

その方が楽しいじゃない？

猫型悪魔は人間界の「猫」とやらを見てみようとか観光気分で町中を歩いた。

辺りは新興住宅地で可愛らしい家々が小さな庭の中に箱庭よろしくちよこんと建っている。

そんな風景は悪魔的には珍しかった。

「おお、なんや。何か個性つてもんはないんやな」

誰に言うでもなくのんきにヒトリゴトを言っていた。

しかしそんな彼を頭上から見てる影が・・・4つ。

彼はしなかった。

人間界の鴉にとって子猫は格好の獲物となることを・・・。

「なんや。あんたら。」

こら、やめいつ」

グアーグアー！

今日の晚餐を見つけた鴉たちは、そんな言葉聞くわけもなく猫型悪魔に向かい鋭いくちばしを容赦無く向け、その爪でふわふわの毛を掴み取るうとした。

「やめんか、鳥ども。」

見とれ・・・おんしゃあ・・・」

猫型悪魔が意識を集中し集まった4羽の鴉に悪魔の雷を落とそうとした瞬間、

「こらっ弱い者いじめしちゃだめでしょ！」

年頃13〜15歳ほどの少女が学校指定と思しき革靴を振り回し鴉の群に勢いよく突進してきた。

「猫ちゃんは食べ物じゃありませんっ！！」

少女の強襲には流石の鴉たちも一斉に逃げ、猫型悪魔は雷を落とすのも忘れて呆然としてしまった。

「大丈夫？にゃんこちゃん」

肩で髪を切りそろえた少女は左頬にえくぼを作りながら優しい声で猫型悪魔をそつと抱きかかえた。

「おおきに。お嬢ちゃん見かけに寄らず強行派やな」

「え？何で子猫ちゃんなのにオジサンみたいな声なの！？」

「そこかい！気になるポイントは」

「えつと、関西弁なのも気になるよ？」

少女は猫型悪魔を物珍しげに光にかざし「誰か入ってるの？」と首を傾げて見せた。

「大ボケなねえちゃんやな。」

これは関西弁違うで。

グロアニア弁やって……。

わいは悪魔や。ありがと、助けてくれて」

「え？どうして猫が喋ってるの？」

やつとそこに疑問を持ったか。

この大ボケ娘が。

猫型悪魔は内心苦笑しながら自分を愛おしげに抱きかかえてくれる少女を見上げた。ふと人間を……この善良そうな少女を試してみなくなった。

「嬢ちゃん。」

助けてくれたお礼にコレ、受け取ってな」

どこからともなく星形の携帯ストラップを取りだし、それを器用にくるんくるんと回した。

「あ、これが取り扱い説明書ね。この星はな、魔法の星や。」

願いごとがなーんでも叶うんや。

どうや？嬢ちゃんは何を願う？」

きょとんと少しタレ目気味な大きい瞳をぱちくりさせて少女はまじまじと猫を見つめ

「もしかして……雑貨屋さんなの？」

と大真面目に聞いてきた。

（なんや……最近の若いモンはゲームやらマンガやらの影響で

猫が話していても気にならんのかい・・・)

そゆ問題じゃなくお嬢ちゃんが相当な大ボケさんなんだと思うけれどね？

「雑貨屋ちゃう。悪魔や。あ・く・ま。」

嬢ちゃん。猫が喋るのも悪魔なのもおどろかんのかい？」

悪魔だと名乗っても少女は相変わらず猫型悪魔を優しく抱き上げたままだ。

「驚いてるよ」。

でもね、猫さん。オハナシ出来たら驚くよりも嬉しいんじゃないかな？

言葉がなくても通じることって沢山あるかもしれないけどね。

やっぱりお話出来た方がもつと相互理解出来るんじゃないかしらね？と少女はにっこりと笑った。

その笑顔をみつめながら猫はぼんやりと物思いに耽った。

「嬢ちゃんみたいはヒトが・・・ならいいな・・・」

「ん？」

「いいんや。なんでもないわ。」

あ、じゃあお礼のストラップ受け取つてな。

使用方法是取り扱い説明書に書いてあるから。

使用期限は今日から3日間。

その間に使つてな。

なーに願つてもいいんや。

世界を望んでもええし不老不死を願つてもええ。

憎いヤツがいたらそいつを取り殺すこともできるで」

「そうなんだあ・・・すごいね」

「嬢ちゃんは何を願うんや？」

「え？私？えつと・・・うーんと・・・うーん・・・」

何故か少女は悩みながらもみもと猫型悪魔の頬を揉み始めた。

「うわわわつくづくつたいわ！このボケ娘がつ！やめてえな」

「あつごめんね。猫ちゃん。」

そしてありがとね。魔法の星、大事に使わせてもらっね」

「そうや。じっくり考えて使ってな」

少女の腕からひょいと抜け出した猫はそのまま忽然と煙になり姿を消してしまった。

その方が楽しいじゃない？（後書き）

猫・・・消えちゃった

Cherry Girl(前書き)

雑誌でたらプチ有名人？

Cherry Girl

土曜日の夕方に繁華街をぶらぶら歩く。

そんな行為は以前に秋保ならば決してしなかった。

（欲目だとは思っけれど私、結構イケてるはず）

電車でも街中でもすれ違いざまにちらりと投げてくる視線は決して不快なものではなく「可愛いじゃん」と好意的な好奇の視線だとわかった。

それは今まで自信なく下を向いて歩いてきた秋保にとってはかなり快感を伴うものだった。

生まれて初めてナンパもされた。

もちろん付いていく気は全くなく無視を決め込んだが顔が笑ってしまつのを抑えるのが難しかった。

ヨーヨー劇場前の広場。

ここが猫型悪魔の言っていた場所。

さつき300円ショップで買ったラインストーンでゴテゴテとデコレーションしたピンク色の鏡を取り出し髪の状態をチェックした

（よし、髪も崩れていない）

しっかりと入れたアイラインもにじんでないしこつてりとつけたマスカラもしっかりキープされており、長いまつげをくると上向きに押し上げてくれている。

スカートたけもパンツが見えない程度のミニ丈ですらりと伸びた足はプレイボーイのマークが入ったハイソックスが非常に似合っている。

「ねえ。君、女子高生？」

（来た！！）

「ねえ塚田さん。もしかして今月号のCherry Girlに出てなかった？」

朝、登校したら今まで挨拶すらしなかったクラスの中でも中心的存在のクラスメートに話しかけられた。

「え？・・・ええ。この前、新宿で声をかけてきたヒトが・・・そんな雑誌のヒトだったかな？」

こともなげに答えたが内心ではガッツポーズをとりたい気分だった。Cherry Girl 最新号は昨夜コンビニでしつかり購入し自分の写っているページをチェックした。

1ページに8人ほど写っている読者モデルのコーナーで秋保は一人ではばページ1/4を独占し他の女の子たちとは違い合計4カットも写真が使われていた。

アップに横顔。全身写真が2枚。

特にアップの写真は非常によく撮れていて自分でも「このヒト綺麗」
と思えるほど美人に見えた。

「すごいじゃん。超可愛かったよ。もう友達に自慢しちゃった。

あのさ、こんど西高とアソぶんだけ一緒に一緒行かない？」

雑誌にでる有名なコとお友達というのはステータスなのだろうか？
クラスメートはすごい勢いでまくし立て、半ば強引に秋保の携帯に赤外線で自分に連絡先を登録し秋保の連絡先も入手した。

「じゃ、明後日ね。よろしくね」

今度、とは明後日のことなのか。

と秋保は苦笑しながらクラスメートの変わりぶりを観察した。

今までは・・・地味だったころは「おはよう」と挨拶しても「あー、うん」とか返事も適当だったが外見が華やかになっただけでその返事は「おはよう」と普通の返事が返ってくるようになった。

そして雑誌に出た途端に友達扱いだ。

悪い気はしないがしつくりくるものではない。

そんな変化を楽しむ余裕が秋保にはまだあった。

イケてる友達と遊んでイケメンと腕組んで歩いて・・・叶えたいことはまだまだある。

これはまだ始まり。

今まではっとしなかった分、良い目みたっていいじゃない？

いちごミルクのプールで泳ぎたい（前書き）

たまに書かせていただいている吸血鬼の純一&実希さんです。
のほほんとしたカップルが好きです。

いちごミルクのプールで泳ぎたい

数学の教科書は同じページのままもう15分は経過していた。

「はぁ・・・」

特大の溜息をつきながら朝日 実希はにぎっていたシャープペンシルをほぼ真っ白なノートに放り投げた。

「もういやーっテストいやーっ数学嫌いーっ」

大きな瞳をぎゅーっつつぶり、いやいやと細い首をぶんぶん振った。

「まあまあ。ね？どこが判らないの？教えてあげるよ？」

純一は呼んでいた物理化学の専門書から顔を上げ、穏やかな声で実希に話しかけた。

大学のキャンパス外れにある生協のカフェはオープンエアスペースがある。

春や秋は学生たちが椅子に座りだべったり勉強したりしていた。

そんなスペースで近所の高校に通う実希はテスト勉強を、そしてそれに付き合いながら純一はレポートのために読書を、と非常に穏やかな放課後を過ごしていた。

「全部！もうね、どこが判らないのかわからないっ！」

数学なんて無くて生きていけるっ！」

「いや、そゆワケにはいかないよ。」

生物を突き詰めると化学になって化学を突き詰めると物理に・・・そして物理つてのは最終的には数学に行き着くから・・・ね？」

実希は来週からテスト期間。

しかも初日から大嫌いな数学のテストがあるってことで非常にご機嫌ななめかつやる気がない状態だった。

「なによーっ自分が理系だからって・・・」

「まーそりゃ一応物理科だしね。」

ほら、実希、どこの問題が判らないの？教えるよ？」

拗ねて駄々っ子みたいなお実希も可愛いなと思いつながら教科書に目を

落とした。

「ねえ純一。吸血鬼って魔法使える？」

何、突然？

純一は一瞬きよんとしそうになったが

（ああ・・・勉強に飽きて現実逃避したいのかなあ？少し付き合うかあ・・・）

と思い直した。

「どうだろ。」

人間から見たら魔法っぽいのかな？

でもね、出来ることなんて限られているから

きっと実希が思うほど万能じゃないよ」

「ふうん。例えば？」

ノートに目を落とすことなく実希は猫の様な瞳をまっすぐ純一に向けた。

黒目勝ちな瞳に見つめられると思わずどきりとしてしまう。

純一はそんな内心を隠しながら続けた。

「え？例えばって・・・そうだなあ

まず、良く物語であるように魔法でカボチャの馬車をだしたり・・・

なんてことは出来ない。

空も飛べない。でも、筋力がすごく発達しているから

人間よりは遙かに高く跳ぶことはできる。

あとね・・・視力はすごくいいけれど透視はできない」

「そっか、んじゃ人間の能力を限界まですごくした感じ？」

「近いかな。あ、でも人間には出来ないこともあるよ。」

記憶を操作したり魔界ってよばれる場所とを行き来したり。」

魔界との行き来はたまに普通の人間でも紛れて来ちゃうことあるんだけれど魔界の空気の毒気にあてられて大抵は絶命するとの説明を付け足した。

「でもどうして急に魔法？」

「今ね、何か流行ってるの。」

魔法を手に入れるって術。

でも鳩の血使ったり公共の場所に魔法陣描いたり

しなくちゃいけないから誰もやっていないくさいけれど」

「ソースはどこ？」

「ソース？え？何で調味料？」

「あ、ごめん。情報源はどこ？」

「へえソースっていうんだ。」

えっとねえ携帯にチェインメールみたいにきたらしいよお

私のトコは来なかったけれど・・・あ、来ていたかも。

ゆみみから回してもらったやつ消してないかなあ？？

見たい？」

そう言いながら学校指定のバッグを引き寄せ中から四つ葉クローバーモチーフにストラップがついた水色の携帯電話を取りだした。

「これ。『悪魔の召還方法』ってヤツ」

はい、と実希が手渡した携帯の画面には悪魔の召還方法が淡々と書かれていた。

「・・・これ・・・」

ぞくり。

純一は背筋が寒くなるのを感じた。

（本物だ・・・）

どの悪魔族を呼び出すかは判らなかったがこの手順も魔法陣も・・・本物であることには間違いない。

「・・・こ・・・これ・・・ねえ、実希。」

この魔法ってやらを試したヒトっているかな？」

「え？居ないんと思うけれどなあ？」

こんなどこかでやったらきつと片付け大変だし・・・ね。

悪魔なんて呼び出せると思うほどロマンチストってそんなにいるのかなあ？」

「本物の吸血鬼を目の前にしてそのコトバも何だかなあ」

純一は苦笑しながら声のトーンを落とした。

「悪いんだけどこのメール、俺にも転送してくれないかな？
ちよつと友達に見せてもいい？」

人間界に住んでいる魔物（CREATURE）たちは取り敢えず新しい魔物がらみの情報があったらその種族の族長に報告する。その情報の吟味し族長が魔物全種族をとりまとめている悪魔族族長に報告し対処する仕組みとなっている。

「いいよ。友達さんでこゆオカルト好きな人がいるの？」

「んーと・・・ま、そんなもんかな。」

この召還術さ、誰かやつたつて噂聞いたら教えてくれる？」

「うん。わかつたあ。聞いたら教えるね。」

なあに？悪魔でも捕まえてみたいの？」

「いやあ・・・悪魔と友達に特別になりたいワケでもないし・・・
まあちよつと気になつてね」

「この噂、もつと大きくなつて都市伝説になつたらTVとかで特集されるのかなあ？」

「そしたら悪魔捕まえるために検証実験するかもね。」

いやだなあ・・・人間に捕まりたくはないなあ

ヘルシンキ宣言とか無視した扱いされそうだし」

純一は苦笑しながら実希が机に置いた教科書の表紙帯を直した。

男性にしては繊細な指をきれいだなと実希は思いながら

「へるしんき？なあにそれ」

少し溶け気味の苺シエークをすすりつつ尋ねた。

紺色のセーターからのぞく実希の指は冷たいシエークのせいで少し赤く染まっていた。

「えつとねえ・・・んと・・・平たく言えば酷い人体実験はしません
つて宣言だよ。」

「ふーん」

「でもきつと俺がその筋の機関に捕まったらモルモット扱いされる
ことは必須だろうからね」

「ねえ純一、じゃあなんで危険を冒してまで人間の社会にいるの？」
肩をすくめて

「そりゃ、実希に悪い虫が付かないように、だよ」

「ふう・・・ん」

実希が純一と出会ったのは今から3年前・・・まだ実希が中学3年だった頃、夕立と雷が怖くて人間とは関わらずのんびりとした吸血鬼生活を送っていた純一の住む洋館に不法侵入したのが初めてだった。

当時を思い出すと『だって空き家だと思っただもん』と実希。『空き家でもね、いくら雷が怖いからって雨宿りついでに一人肝試しなんかしちゃだめだよ？』と苦笑いの純一。何故か純一はそんな非常識娘な実希に惚れてしまい今まで人間社会を避けていたのに実希より2つ学年上として人間社会にとけ込み高校、大学と進学した。

『実希はなかなか振り向いてくれなくてねえ』なんて言いながらじやじゃ馬・実希と友達ともつかぬ関係が続けていた。

「ふうんって相変わらず冷たいなあ。

で、実希はテスト勉強進んでいるの？

もう20分は休憩したからそろそろお勉強再会しようね」

「えー・・・仕方ないなあ

そろそろやるかあ・・・」

実希は不満そうに頬を膨らませながらも教科書の問題に目を落とし「うーん・・・」と悩み始めた。

そんな図をほほえましく見ながらふと純一は質問をした。

「さっきの話だけれど実希はさ、魔法が使えたら何を願うの？」

「そうだなあ・・・苺ミルクのプールで泳いでみたいな」

「え？苺ミルク！？」

「うん、だって苺ミルクって小さなパックでしか売ってないじゃない！
い！

だからね、アレでプール作るのがって不可能に近いと思うの。
魔法使えるならそれしたいなあ」

純一は実希の無邪気な善良さが嬉しかった。
やっぱり実希はいい。

魔法なんてどこにもないのよ

秋保には密かに憧れている同級生がいた。

武藤 葵。

流行りのエロ格好良い系歌姫を彷彿とさせる大人っぽい少女でかなり明るくカラーリングした髪をボリウム一杯にアレンジしアイメイクがつつりのギャル系美少女だ。

秋保がでたCherry Schoolよりももっと盛ったギャル系雑誌の読者モデルをしておりたまに他校の学生が彼女目当てでうろついているプチ有名人だ。

そして彼女と人気を二分する生徒。

朝日 実希。

小柄でグラマー。そして大きな瞳が印象的なベビーフェイスはグラビアアイドルのようでクラスはもとより他のクラスの男子たちからも人気があった。

性格も明るくて元気。

武藤 葵のようにプチ有名人ではないがその親しみやすいキャラクターでかなり男子生徒から人気がある。

取り巻きのようにギャル男まがいな男どもを侍らしている武藤 葵とは異なり朝日 実希は彼氏と思しき大学生っぽい男と一緒にいるところをよく目撃されていた。

二人とも綺麗で可愛くて男の子にちやほやされて・・・同性の友達も多くて・・・

毎日が楽しそうに見える。

悩みなんてなさそうに見える。

何で私は同じ女なのにああなれないの？

今なら綺麗になったからあの二人みたいに学生生活を楽しんでくれるの？

昨日遊んだ西高の男子生徒たちとは取り敢えずメアド交換をし、数通メールのやりとりが続いている。

「彼氏いるの？」

「今度二人で遊ぼうよ」

そんな下心がちらちら見えるメールをもらっても何だか虚しく感じる。

でも何で？

何か盛り上がらない。

向こう3人とも結構格好良かったし地味だった頃だったら絶対に一緒にいることがないであろう「主流」な人たち。

でも何故か・・・いまいち楽しめない。

何で？

満たされないの？

学校一のイケメンと言われる隣クラスの中野くん突然声をかけられた。

「塚田さん。おはよ。」

ねえ、この前Cherry School見たよ。可愛かったよ。

あのさ、メアド教えてよ」

正直嬉しかった。

今まで、廊下ですれ違った時などに「格好良いなあ」と思っていた。同級生の中でもダントツにオトナっぽくて細身長身で盛りヘアが何だか夜の男っぽい。

同校他校問わずいつもとびきり可愛いコしか連れていないと有名でそんな彼に声を掛けられたというだけで秋保は舞い上がりすぐに携帯のメールアドレスを教えた。

その夜、中野から早速メールが届き「今度遊びに行こうよ、土曜日空いてる？」と誘われた。

「オトナっぽい格好してこいよ」

そう中野くんと言われたからちよっと頑張ってお姉系のワンピースに

っかり巻き髪した。

まだ慣れないメイクにいつも以上時間をかけてあの猫型悪魔に言われた通りに丁寧に色を乗せた。

チエーン店だけれど雰囲気の良い居酒屋で慣れないお酒飲んだらお店を出る頃にはふらふらした。

気付いたらホテルの大きなベッドの上にいた。

「初めてだったんだね」

彼はこともなげに言ってそして普通にホテルの前で「じゃ、また学校で」と別れた。

次の月曜日、学校ですれ違った時、中野は別の女の子を連れていた。一つ上の美人で評判の先輩。

何？私はなに？

これがよく言う「遊ばれた」ってやつなの？

私が欲しかった『綺麗の特権』ってこれなの？

泣きたいような諦めたいような心境での下校途中に朝日 実希とその彼氏をみかけた。

（ふうん。格好良いじゃない）

朝日よりも20センチほど身長の高い彼は優しそうな眼差しを朝日に向けていた。中野のようにチャライ印象はなく真面目そうな優男に見えた。朝日も学校で見かける時よりも数倍可愛い顔で手にしているシェークを彼に差し出し「うわっやっぱり甘い」って少し顔をしかめる彼氏を見て楽しそうに笑っていた。

手をつないでるでもくっついてるでもないのに甘い二人だけの空間だった。

何で私は出来ないの？

何で中野くんは他のヒトと一緒になの？

そうよ、魔法なんてどこにもないのよ。

やっぱりちよつと位外見が変わったところで本質的なところは・・・

・元々の美人みたいな恵まれた日常は手に入らないのよ・・・

猫型悪魔・・・

秋保の脳裏に猫型悪魔の言葉がよぎった。
(あと一回。まだ魔法はあるわ・・・)

残り香と誤解（前書き）

お久しぶりです

残り香と誤解

実希から差し出された新作の杏仁シェークなるものは非常に甘く、
つてか甘すぎて予想はしていたことだが思わず顔をしかめてしまっ
た。

「ね、これ何だか本物の杏仁豆腐より甘くない？」

「え？そうかなあかなり忠実に再現してると思うんだけど・・・」

「」

ずずーっとシェークをすすりつつ純一を見上げた。

しかめ顔の純一を楽しむかのように実希はにんまりとしている。

「？」

微かな違和感。

実希とシェークの甘い香りに混ざって非常に微かだが『何か』の香
りがした。

（CREATUREのにおい・・・？）

純一のように人間界に溶け込み生活している魔物は少なからず存在
する。

しかし漂う香りは魔物本体というよりその残り香のような・・・
魔術を感じさせる・・・小さな痕跡。

その発信源と思われる方向・・・右前方には実希と同じ制服を着た
ギャル系の美少女がいた。

ふと美少女と目があいそうになりそのまま視線を泳がせつつ観察。
どうゆう構造になっているのか膨らませた髪型にくるくると巻いた
髪。

黒々とした睫毛は眉まで届きそうな程だし揚げ物でも食べた後のよ
うな唇は何だか海洋生物を思わせた。

（キレイなのに・・・何かもったいないなあ）

純一は密かに思いつつ実希を観た。

（うん。やっぱりナチュラルがいいなあ）

「ねえ。実希。」

今すれちがったコつて同じ学校のコだよね？」

少女と十分な距離を取った後、小声で聞いた。

「え？えつと・・・ああ。隣のクラスの塚田さん。」

なあに？純一って彼女みたいな美人系が好みなの？」

「違う違う。実希が一番だって。」

そうじゃなくて・・・あのさ、彼女って最近変わったことなかった？」

「え？何で知ってるの？」

以前はもつとこう・・・正統派美人っていうか・・・

もつと近寄りがたい美人さんだったんだけど最近、何かギャルになったの。

以前は以前で隠れファンが沢山いたけれどギャル系になった途端、雑誌に出たりですつこい有名人になったの」

以前の物静かな美人さんの時も良かったんだけどなあと実希は続けた。

「そつか・・・」

「何で？塚田さんのこと知ってるの？」

「いや・・・えつと・・・彼女からCREATUREの臭いがして・・・」

「なあに？それ。香水？」

とぼけた答えをする実希につっこみを入れたかったけれど保留した。
「魔物。俺たちみたいな種族のことだよ。」

さっきの彼女・・・あの子は完璧に人間だと思っけれど身近に魔物がいると思う・・・」

「ふうん・・・。じゃあ私と純一みたいに友達なのかしら？」

（ええやつぱり俺ってまだ友達かあ）

若干凹みつつも悪気はないであろう実希に笑顔を向け

「そうだったら良いけれど・・・悪い魔物だったら・・・」
と穏やかに返した。

「同級生が魔物の餌にされたりしたら実希もいやでしょ？」

「餌……って喰い殺されちゃうの？」

「種族によってはね。」

俺たち吸血鬼や夢魔は殺さずに餌とするけれど……

もしも悪魔族と契約なんかしていたら確実に殺される……

あの魔法陣のこともあるし……。」

「……ねえ。純一にとって私って餌候補？」

真摯な瞳で突然、実希が問うた。

あまりに衝撃的な台詞だったので驚いてしまい思わず足を止めてしまった。

「何バ力な事言ってるの。」

俺、今まで一度でも血吸った事ないだろ？」

ムキになって語調が少し強くなる。

「そっか。餌ではないんだ」

さして気に留めるでもなくまたストローに口を付け歩き出した。

太陽が沈み、空が藍色のグラデーションに染まる中、純一は実希を自宅まで送るべく2人でのんびり歩いていた。

「この道……暗くて民家から遠いから一人では通っちゃだめだよ」
実希の家がある住宅地には少し大きめの公園がある。

そこを通過していくと住宅地の道沿いに歩くよりも5分ほどショートカット出来る。

しかしその道は鬱蒼とした木々の合間にところどころ外灯があるだけで昼間はともて穏やかな公園だが夜は少し……若い女性には勧められない道だった。

「えー。この道。すっごく便利なのにい」

「便利でもだーめ。」

俺が送るコト出来る日だけにしようね」

「過保護だなあ……」

でも……確かにこの道は夜に一人で通っちゃダメって

小さい頃から言われていたなあ」

「でしょ？ほら、みんなの言うこと聞こうね」

「はあい・・・あつねえ見て！ちようちよ！」

実希が指さす先にちようちよにしては大きな何かが蝶々にしては随分としつかりとした飛び方でひらひらしていた。

日もかなり落ち、黒いシルエットだけ見えるソレはスズメなど小鳥とは明らかに異なる飛び方で方向転換しながら飛び去った。

「あれはね、実希。コウモリだよ」

「へっっ凄いな。コウモリって日本にいるの？」

「特に住宅地にね。」

屋根裏とかに巣を作るんだよ」

「すごい。アレみたい。ホラーっぽい」

楽しそうに空を見上げる実希の顔に髪が一房かかっていた。その髪をそつと指にからめ頬を撫でた。

「ん？」

小首を傾げるように見上げてくる実希の大きな瞳が外灯の光を拡散させてきらきらしている。

（キスしたら・・・だめかな？・・・）

このまま実希の口唇の感触を確かめたい衝動を感じた。

と、同時に雲間から満月の明かりが薄暗い公園を照らした。

（やばい・・・何でよりによって満月なんだよ・・・）

本能が・・・吸血願望が純一の中で頭をもたげてくるのがわかった。

吸血願望とともに犬歯が伸び純一の種族の本来の姿となった。

口元から覗く牙を見た実希は久しく見ていない怯えた表情を一瞬見せ

「あのね、私は餌になるきはないから」

そうハッキリと言い、アーモンド型の大きな瞳を勝ち気に煌めかせながらぷいっと純一を置いて歩いていつてしまった。

吸血鬼だから怯えさせた？

いいや。

もしかしたら自分が普通の人間だったとしても同じように怒らせて

しまったかもしれない・・・。

なんだか自分の下心を見透かされた様な気がし純一は実希を追いかけることが出来ずに立ちすくんだ。

残り香と誤解（後書き）

また描きます

悪夢を知る男と肩を落とす男（前書き）

お久しぶりです

悪夢を知る男と肩を落とす男

秋保は携帯のアドレス帳から猫型悪魔のメアドを呼び出した。

「悪魔に頼めば……」

『お願いが決まったわ』

悩んだ挙げ句その一文だけのメールを送った……途端にあの猫型悪魔が目の前にいた。

ここは秋保の自室。

窓はあるが締まっておりますどこから入っていたのか全く持って謎だった。

「ど……どこから？」

「なんや。そんな質問が願いなんか？」

猫型悪魔は相変わらず不思議な方言で小憎たらしい発言をした。

「ち……違……う……私……は……」

かいつまんで中野の事を説明した。

話しているうちに自分がどんなに軽率で軽薄だったかを知り少し胸が苦しくなった。

「……ほう。んじゃねーちゃん。」

その何とかがってオトコを殺したいんか？」

何と物騒なコトを！

思いも寄らない発言に秋保はぎよっとなって「怖いコト言わないで」と言い返した。

「彼の弱点は知ってるの……」

以前一緒に遊んだ時に知ったのだ。

あのクールな彼がまさか「アレ」が怖いなんて……。

「ほう……でもいいんか？」

その程度の呪いで対価を払って……」

「……そうね……もう……いいわ」

秋保は年齢にそぐわない程、くすんだ微笑を浮かべて答えた。

「お願い……」

もう後には引けない。

悪魔との正式契約が終了しあとは執行を待つのみとなった。

中野 光太郎はいわゆるイケメンだ。

178センチの長身にすらりとしたモデル体型。

そしてアーティストだか芸人だか境界が曖昧な元大物政治家の天然孫にも似た端正で甘いルックスにより非常に人間関係とくに女性関係に恵まれていた。

女は寄ってくるし声を掛ければ大抵の女は付いてくる。

そして中野はそれら女性を口説き落とすためのマメさも持ち合わせていた。

そんな彼が何人かいる親しい女性のうちの1人である春香（一人暮らし・美人女子大生）の部屋のベッドで全裸のまま同じく全裸の部屋主と寝ていると変な夢を見た。

「のう。少年。

ワシはな、お前さんには別に恨みはない」

よりによつて声の主は中野の大嫌いなアレだった。

「ある人からのお願いでな。しばしそに身体、借りるぞよ」

アレは中野の腰ぐらいまでの高さがある。

（こんな大きなヤツ……マジ勘弁）

イヤな後味を残し夢から覚めるとそこには予想した通りに肢体を惜しげもなくさらす春香が「んゝゝ」と寝こけていた。

「変な夢……」

中野はまだ寝ている春香の寝顔にキスをし「何かのも」とベッドから起きあがった。

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

中野の断末魔の悲鳴ってか叫びが当たりにとどろいたのはその5秒後だった。

まだ週始めである火曜日の居酒屋はさほど混んではなく男二人がマイペースで飲んでいても店員も嫌な顔は見せない程度だった。

3杯目になるスダチサワーを飲み干した純一は「えっと・・・にこり酒冷やってのください」と注文し京介に向き直った。

「で、彼女に何て言われたの？」

いつも淡々としている純一が荒れているなんてどうせ例の実希ちゃんに何か言われたのだろくなあとアタリを付け京介は聞いた。

「まだ彼女じゃないんだよ・・・」

純一は肩を落とし心底寂しそうな声で言った。

「あつと・・・えつと・・・三人称の『彼女』ね。」

実希ちゃんに何て言われたの？」

落ち込んでる男は扱いにくいな、なんてちよつと内心苦笑しながら京介は弁解した。

「私は餌じゃないって・・・はあ

俺・・・そんな扱いしたのかなあ？」

純一はうなだれて大きく溜息をついた。

「そうだねえ・・・そんなコトしてなくても種族だけで疑われるからねえ。」

えつとさ、実希さんに噛み付こうとしたことは？」

「今まで2回・・・一回は知り合ったばかりの頃でもう一回はふざけて・・・」

でも笑いながら何バカしてるの？って・・・

あれを気にしてるのかなあ・・・？」

見ているこつちも一緒に肩を落としたくなるほどに純一は凹んでいた。

そんな姿を不謹慎ながら京介は可愛いなと思った。

この落ち込みこそ純一にとって実希が「吸血だけの対象」じゃないことを意味している。京介にとってそれが嬉しかった。

「実希ちゃんにも伝わるよ」

京介は力チンともう一度、純一と乾杯し風味の薄い日本酒を口に運

んだ。

期待値（前書き）

久しぶりに書きました！

期待値

「ばかつばか純一っ」

実希は自室でベッドに転がりつつ枕にぼふぼふとパンチを繰り返していた。

『さつきはごめんね。そんなつもりはないから。』

あの後、すぐに来た純一からの携帯メールに対し返事をせずにボクササイズよろしくぽかぽかと枕に八つ当たりをしていた。
頬に手が触れた時、どきつとした。

このままキスするのかな？と思った。

でも牙が見えて……

ん？思った？きす？キスってキス？もしかしてコレは期待？

え？私、期待したの？

血吸われるのはイヤだけれどキスならいいの？

え？何で？

「……ん？……いいのかな？」

吸血鬼……純一は吸血鬼……

いつも穏やかで優しい純一。

何故かずっと側にいてくれる男の人。

私……は？

彼にとつては餌？

でもそうだったらもうとくに咬まれてる？

一緒に歩くとき、いつも実希の歩幅に合わせてくれる。

勉強だって根気強く教えてくれる……勉強に飽きて放り投げた時だってもう一度やる気が出るまで待つてくれる……。

本当は知っている。

純一は実希を大事にしてくれている。

決して傷を付けようとして今まで一緒にいるわけじゃない。

「もしかして……ちょっと悪いことした？」

酷く傷付いた表情の純一を思い出す。

公園に置いてきてしまった優しい人。

「・・・今度・・・ちゃんとあやまるから・・・」

自分の気持ちもよくわからないまま実希は「もう寝よう」考えすぎて疲れる前早々に眠りについた。

呪いの対価（前書き）

「猫」ねこねこ

呪いの対価

悪魔には息子がいる・・・正確にはいた。
勘当した息子だ。

「父上、自分は人間に仕えます」

つやつやした漆黒の毛並みとエメラルドグリーン色の瞳の面影を浮かべる。

「彼女は・・・あのヒトは自分がいないとダメなんです」
自分がいないとダメ？

お前に何が出来るのか。

人間界では通常の「猫」と同じように猫語しか話せず魔力も使えないお前に！

ただただ人間の・・・あの下等な生き物の玩具になりさがるというのか？

あの脆弱で何も出来ない・・・悪魔から見れば餌でしかない生き物の。

誇り高き一族の血を受けながら・・・

許さない。

絶対に許さない。

二度と目の前に現れるな・・・そう言ってもう3年になる。

息子は人間の雌と一緒に住んでいるらしい。

ペットとして・・・普通の人間界の猫として。

その人間の雌は恋人を亡くし一人で健気に生きている・・・らしい。
どれもこれも伝聞でしか息子の近状を知らない。

まれに人間界に行った同族たちからそれとなく息子のことを聞く位だ。

人間なんて我々悪魔族と一緒に・・・力がない分、それ以上に醜く自己中心だと聞く。

悪魔は試してみることにした。

人間の欲望を……。

その醜さを。

一人は地球の鳥から悪魔を助けてくれた小娘。

そしてもう一人。

秋保。

幼稚な召還術の真似事で本当に悪魔を……我々を呼び出せるとでも思ったのか？何て稚拙な！なんと愚かな！

しかもそこまでしての願い事が「キレイになりたい」だと？

愚かだ。

余りに滑稽で幼稚で喜劇にすらならない。

そんなコトのために魔力を使うのはもつたいない。

折角だから彼女の「欲望」を試してみたくなつた。

願いが叶いどん欲に次ぎを求める人間は……どこまで醜いのか見たくなつた。

しかし……秋保の願いはちよつとした「こらしめ」程度だつた。

カエル嫌いの男の腹にカエルを憑依させて欲しいと頼まれた。

しかも2日間だけ。

そんなままごとみたいな願いに命をかけるつもりか？

愚かだ……その愚かさは無知からなのか生粋のものなのか……

自分を弄んだ男を殺すのか？と聞いた時、秋保は即座に

「まさか！」

と言つた。

恨みはしないのか？

自分を弄んだ男を切り刻みたくないのか？

わからない。

自分勝手だが他人を恨み切れない。

他力本願で愚かだが素直でもある。

人間とは……「猫」は判らなくなつた。

息子が仕えている……魅入られている種族がどんなものか。

明日、秋保の願いが終わる……つまり、明日になれば秋保の魂を

もらうことになる。

そして恐らく明日、あのもう一人の少女の願いも判る。

あの善良そうな少女の欲望は……

秋保の幼稚な欲望を思い出すと「猫」は小さく溜息をついた。

契約は契約。

「猫」は秋保に連絡を取るべく携帯でメール文面を作成しはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1562f/>

Pearl in the Shell

2010年10月14日18時05分発行